

新年会が続いたが、エル・チャレンジの組合員である大阪手をつなぐ育成会の新年会での藤田理事長のお話が心に残った。藤田さんは、和歌山県の育成会が、役員になる人が不足して解散してしまったけど、新宮市など幾つかの育成会支部が再建を希望して、近畿各府県の育成会が応援を決め、藤田さんも新宮に足を運んだという話をしてくれた。もともと優しい語り口の藤田さんだが、昨今の子どもや親たちが孤立して惨劇に至ってしまっている事件に思いを馳せ、「ひとりぼっちにさせない」という育成会設立の原点を優しく語りかけられた。藤田さんは、お話の前にハーモニカを取り出して、会場から「兎追いしかの山…」と、合唱を引き出した音響効果もあって、ボクは「ひとりぼっちにさせない」というフレーズに痺れた。

知的障害者は50万人と言われているが、一時期育成会は30万人の親たちを会員としていたと聞いた。現在では、知的障害者本人や賛同者も入れて公称30万人らしいが、親の会員は12万人と言われている。育成会は今年60周年を迎えるが、60年で知的障害者施策は格段の発展を遂げ、たった3人から始まった育成会も燎原の火の如く大きくなったが、いま減少カーブに転じている。

『なび』前号で、ボクの故郷が水俣市の隣町であることを書いた。ボクの父親は87歳だが、長くチッソの下請



「ひとりぼっちにさせない」「ことあるごとに意思を表明する」「泣き寝入りさせない」「泣き寝入りさせない」

け運輸会社で働いていて、水俣病発症に脅えていた一人だった。暮れに帰郷し、父の昔話を聞いていて、「輝夫、お前どうしたんや、指動かなくなったんかと言ったことを覚えてる」と語ったことが鮮烈だった。そうか、水俣病患者連盟委員長だった川本輝夫さんとも一緒に働いていたのかという新しい発見だった。故人となった川本さんだが、彼も、まったくの孤立から患者組織を大きくし、晩年、組織の悲哀も体験した。「熱意とは、ことあるごとに意思を表明することだ」は、彼の名言だ。

ボクが藤田さんの話に惹かれたのは、育成会を部落解放同盟とダブらせたからでもある。その減少カーブは育成会の比ではないかもしれない。父の話から川本輝夫さんの話に惹かれたのもそうである。昨年、松岡徹さんで闘い敗北した参院選挙での、松岡さんの「泣き寝入りさせない」社会が部落解放運動の目標だという演説に、「これだ!」と感じたということは、『なび』既号で書いた。

「ひとりぼっちにさせない」「ことあるごとに意思を表明する」「泣き寝入りさせない」、一見、組織内部への「内向き」に聞こえるが、背景にある歴史と現在の社会状況を重ね合わせると、「外向き」でもあることに気づく。

可哀想に、川本輝夫さんは晩年、寂しい酒が過ぎたのかもしれない。松岡さんも、ボク達も戒めないといけない。

（株）ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸編

死刑台のエレベーター



譜・節: ルイ・マル
原作: ノエル・カレフ
撮影: アンリ・ドカエ
音楽: マイク・デイビス
キャスト: ジャンヌ・モロー
モーリス・ロネ
リノ・ヴァンチェラ
製作: 1957年フランス
モノクロ91min
DVD録: IMAGICA TV

古今東西、おびただしい数の映画が作られ多くの女優を輩出してきた。しかし、その美しさを永遠に銀板に刻印し、語られつづける美女はどれほどだろう。わが邦画の代表といえば原節子の満面の笑みであり、洋画なら退廃の美を背負ったジャンヌ・モローだろうか。トリュフォー監督の「突然炎のごとく」(62年)、ブニュエル監督の「小間使いの日記」(64年)、J=ポール・ベルセンドと共演した「雨のしのび逢い」(64年)などで、その独特の容貌と自我を持つ存在をアピールしていたのがジャンヌだった。当時29歳であったジャンヌを主人公に演出したのが、25歳でヌーヴェルバーグの新鋭といわれたルイ・マル監督であり、「死刑台のエレベーター」であった。数々の賞を得て、ジャンヌはこの映画以降揺るがぬ評価を得ることになったという。

僕は最初この映画をTVで見た。封切りから数年後だったのだろう。マイルス・デイビスの甲高いトランペットが深闇を切り

裂くごとく響き、ジャンヌの大笑しの顔、密閉されたエレベーターの中のモーリス・ロネ、そして夜の街をさまようジャンヌの憂いがドラマのサスペンスを盛り上げた。しかし、何度見ても不自然さが残るシーンもあった。土曜日(この頃はフランスも半ドン)とはいえ、白昼の都会のビル上階にロープを渡してよじ登るとか、主人公が共犯者であり不倫相手の名前を尋ね歩くシーンとか、誰が撮ったのか2人のプライベートな写真が突然現れるなどなど、鼻白む個所が気になっていた。とはいえジャンヌ・モロー、モーリス・ロネら役者たちの立ち居振る舞いや圧倒的な存在感に魅了され、洗練されたかっこよさを満喫できる逸編ではあった。

今回改めて見ると、この犯罪に男女のチンピラが起こしたドイツ人夫妻殺人事件がエピソードとして織り込まれ、大人の知能と子どもの粗暴さを二項対立させて興味深いと思った。加えて撮影が美しい。パリの夜の華やかな表情と、髪を乱して恋人を探す退廃的な表情のジャンヌの明暗対比が孤立感を深める。セルジュ・ブルギニョンが演出した「シベールの日曜日」(62年)や、メルビル監督の「仁義」(70年)を、クールな映像で見せてくれたアンリ・ドカエが撮影している。

この映画ではしばしばアルジェリアやインドシナなどフランス領が話題となる。社会的視点への萌芽も見られるマル監督だが、その後「ルシアン青春」(74年)や「さよなら子供たち」(87年)など、戦禍の少年たちを主人公に、瑞々しい作品を作り出していく。所蔵するマイルスのアナログ盤サウンドトラックのアルバムを見るたび、この映画を思い出す。

hidarimaki

